

常盤津家之伝記

□²⁰ 初代 常盤津文字大夫 (宝永六-天明元)

京都身所、佛具商に依拠し駿河屋文右衛門と云う。官古路豊後傳に
従ひしより、享保十五年正月、師豊後傳と關東下向の途につき、
同七年七月、名古屋に滞在し(常)更に師に還りて十八年九月江戸に
下り、哥屋所、岸の小芝居に「おきん伊八」道行上りを演ず。元文三年
二月、市村座に「津向嶽」上りのカタテに出勤、三月十七日に至り、風俗也
紊乱すとの理由にて所奉行細生下野守に興行中止を命ぜられ、元文五年
師豊後傳京都に病歿す。官古路常盤津再興の事を願ひ許す。官
古路文字大夫の名にて寛保二年正月より中村座へ出勤、延享四年
に至り中村座歿し世番附に、官古路改め南東の名を冠し、十月
二十五日所奉行馬場讀政守より禁せられければ、直ちに常盤津を改め
同十月興行に出陣し、其後、安永二年まで三座の依頼に心し、芝居
出勤し、安永三年十一月、市村座興行に出勤を限り、内弟の兼
太夫(後三日月文字大夫)に譲りて本所小松川に隠居し、松舟齋文中と
号し、其の後天明元年二月一日病歿し、法号、常光院通寂了と
云い、麻布本尾祥西の寺中興徳院に葬す。享和七年七月

○猶、享和年には色々の説がある、七一三才説と云ふ才説とある、七一三才説は
「續名声劇場談話」等にて七一七才説の「劇場年表」のようである。

然し、この劇場年表は元文元年二月、市村座を津向と改む、文字
大夫の年表は三ノ方と記し、あるを換算すると、天明元年には七一三才と
なり、劇場年表の七一七才説は自家権者の津論なる。故に、下は
七一三才説とせん、宝永六年の生れとする。

「常盤名種」の記より、彼は始め石所に住み、宝暦十三年に捨物所へ
移転し、此とある。尚書之園の日本演劇史には元文元年中、豊後傳と
隙を生い去る、都中中以従い、暫く官古文中と云い、翌二年、母の如
睡して文字大夫の名に復し、是處夫の死後は、土岐豊中も名乗ると云
ふ。

◎宗之系圖では此の人を六代目とし、初代を伊藤玄羽、二代を岡本文彦、
三代を都越信孫、四代を都大夫中、五代を官古路豊後傳とす。

○男の嗣子なく一女也は伊傳市の内之助の妻と云なり
勿論無意味なりと普通世間を教之ていふより人の初代と云

202

□三代目 常盤津文字太夫 (有傳す) 實政上

初代 鐘太夫 次 初代 萬太夫

初代文字太夫の弟子である。その履歴は不明である。常盤津種、及び常盤津年表によると初代を鐘太夫と云い、宝曆十一年五月森田屋に常盤津仲太夫の才三番目にお勤しむ。初舞台にて(常盤津年表に「はさのり」三二とある)三十一才の若かり。先輩の志事太夫、造酒太夫の居るころは芝居は出られぬなり。天明初六年西人常盤津を去る。即ち七年十一月中村屋に萬太夫と改め、一躍文字太夫のワキ諺りに進み、更に安永二年十一月師文字太夫、小松川に隠退するや、翌年永三年四月森田屋にて太夫場を振る(三十四才)爾後之ヲ諺りとて各屋にお勤せり。天明七年師の七回忌の時、小松川より、文字太夫の名を譲られ(三十五才)二月一日西國萬屋(即ち兵衛方にて初代)進善と兼せ、改名披露会を催し、其の傍實政十年十月中对座(木質)上より、お勤後、病余にかり、同十一年六月三日には、同身合にて常盤津文中とす。越之七、八月、弟合に於て、大才に改めり。同土日葬あり。漢字新編正念寺中願信寺に葬。法号、常盤釋文中法師禪印と云。妻、甘菊と云。○印集年表に、言年四、由力日記(女)は諺りたり。○常盤津家元系譜に於ける三代目なり。○俗稱、越後屋と云。

203

□三代目 常盤津文字太夫 (實政四) 文政三 初代 二代目 小文字太夫

二代目文字太夫の實子、實政四年生れ、幼名を林之助と云。實政上、年六月三十日八才にて、二代目、小文字太夫となり、文化四年(十九才)

上月市相座の初舞台を勤り、夏の信文政三年(三十八才)七月三代目文字
 大夫を継いだ。同年十二月十日夭折した。享年二十八(家系系譜八代目
 口傳の三代目の家元と云ふことについては、当時尚初代文字大夫専松子の現存
 してゐる七多少の行傳の一面をもうとく。常磐若津年表に「寛政工
 年三月十三日文中大為左伴林之助の文字大夫となつた」とあるが、
 お菊殿並に若太夫小松川へ行き此の口傳の事大に骨を折るといふこと
 あつたよと察せられた。

204 □四代目常磐若津文字大夫(文化元—文久二) 初代三代目文字大夫 後豊後大塚
 排傳市川男若松の才子の子の幼名を男熊と云ふ。父男若松の母即ち二世
 市川門之助の妻お亀也の初代文字大夫の才女也。縁故から三女
 文字大夫矢折せり。養育子となり。文政三年十一月河原崎屋にて三世
 の文字大夫鶴屋名弘の女とす。其の時天保八年正月四代目文字大夫と
 改の更以嘉永三年十二月十八日嵯峨所より豊後大塚と受領し
 藤原相光と稱し、萬延元年四代目岸次古式部と稱しを全し分離
 して自ら自ら松野齋文中と名乗る。三味線を弾き流したる文又
 二年四月一日病歿せり。享年五十九才。法名興徳院祖師殿良釋
 長と云ふ。(家系系譜九代目)

205 □五代目常磐若津文字大夫(文政五—明治三)
 初代林之助 二代目小文字大夫 三代目常太夫

文政五年生。前若津清元(現常太夫)と稱し、天保七年(十五才)の四代目
 立川馬馬の子とす。養育子となり林之助の女とす。天保八年養育父
 三代目小文字大夫の四代目文字大夫と改めり。同年四代目小文字
 大夫を継ぎ、ワキ役より出勤。其の時文政三年也月字大夫と相統

一と市村屋興行より大夫場を勤め守政五年六月(三十七)五日
文字大夫と改名七月森田屋にお勤せりも父子の向く確執を生じ
離縁となり六代目兼大夫と稱し川瀬石所に住む、明治二年
二月九日改享年由人才浅草由圓幸龍寺に葬る。
法名能持院是経信士と号す

◎宗元の記録は日立代目兼大夫とあれど六代目なり

◎戲場年表には新右衛門内所に住むとあるは二右和佐大夫の誤り
よしか川瀬石所である

補 尚二右和佐大夫の誤りよれば流け非常な美男子で当時八代目
市川團十郎と人気を争い位であらうを、其大親の因を争い素
行納まり不多額の借財を背負うたのを養母の怒りに觸れ遂に
家を違われりといふ其の上で離縁されりといふ事ありあり

○林申の家元當時出りたる師範然る系譜には此の人名を削除したる
も現家元に至りて之を加えて十代目とす

□六代目常盤津小文字大夫(天保十二—明治五)

幼名を能吉といひ更に更に定吉と改め、通稱を常圓佐六と云ふを
佐六文中と呼んでゐる。曲豊徳大権の實子で天保十二年生。二小は左様か
日本橋若町の芸妓大島の子、妹は小女との間に出来たりて母方(引取ら
れり)は十の才(守政三)の時実母を以て死改しはを豊徳大権方(引取ら
れり)は然り、義兄弟四代目小文字五代目小文字の離縁と
なるといふ元治三年(慶応三年)中村勘三郎再婚の節同人取立に
六代目小文字大夫を相統一十月中村住み入る茂兵衛の道行上り
に出勤し、其後明治五年まで芝居出勤あり、同年十月十日
病歿しは享年三十三、浅草阿部川田祿念寺中願信寺(葬る)
○林申の七代目小文字大夫家元たり、師範然る系譜には彼を十代目以
教之は現家元に至り五代目小文字を十代目に加えて十代目家元と
してゐる